

生物多様性の保全



マテリアリティの中長期ビジョン

	リスク	機会	対応の方向性
長期	<ul style="list-style-type: none"> ●生態系の損失に起因した環境変化による資源の調達不安定化および調達コストの増加 ●事業での土地利用に起因した生態系の損失による企業イメージ低下 	<ul style="list-style-type: none"> ●資源の調達不安定化および調達コスト増加の回避 ●事業での土地利用に起因した生態系への影響の緩和・回復による企業イメージ低下の回避 	<ul style="list-style-type: none"> ●気候変動・資源採掘・環境汚染が生態系に及ぼす影響（種の絶滅や生息・生育域の移動、減少、消滅など）を踏まえ、これらの問題に取り組むことで、生態系損失の低減にも寄与していく ●地域の生物多様性と調和した保全施策の実施
	外部環境	ステークホルダーのニーズや期待	中期目標
中期	<ul style="list-style-type: none"> ●IPBES (生物多様性および生態系サービスに関する政府間科学政策プラットフォーム) による評価報告書公表 (2019年5月) にともなう国際的な保全強化 ●生物多様性COP15 (2021年10月、於 中国・昆明など) での「ポスト2020生物多様性枠組み」の採択に向けた検討 	<ul style="list-style-type: none"> ●環境配慮要請の高まり ●ESG投資の拡大 (投資家による企業活動の転換促進) 	<ul style="list-style-type: none"> ●気候変動対策・資源循環・環境汚染防止への取り組みの推進 ●地域に根ざした環境課題への取り組みの推進

マテリアリティの2020年度目標と実績

○：計画通り △：遅れあり

主な取り組み内容	2020年度目標	指標	2020年度実績	自己評価
国内拠点の生態系調査を生かした保全活動の推進	<ul style="list-style-type: none"> ●国内拠点での在来生物の育成・保護 ●国内外での植林・育林活動の実施 	各取り組み項目の実施	<ul style="list-style-type: none"> ●京都工場でのピオトープ(※)づくり ●パジェロの森 (山梨県) での植林・育林活動の実施 ●タイでの植林プロジェクト開始 	○

※：ピオトープ：生物が自然な状態で生息している空間



基本的な考え方

すべての生きものは様々な関係で複雑につながり合い、バランスを取りながら生きています。私たち人類の生活は、この生物多様性による恩恵を受けています。

三菱自動車は、工場建設をはじめとする土地利用や、工場からの化学物質の排出、製品の使用や事業活動によって排出される温室効果ガスなどにより、生物多様性に直接的または間接的に影響を与えています。中でも、気候変動による地球環境の変化は、生態系に直接的かつ大きな影響を及ぼすとされており、気候変動対策をはじめ、生物多様性による恩恵を持続的に受けられるよう、生態系を守っていくことが、当社の重要な課題と考えています。

当社は、2010年8月に「三菱自動車グループ生物多様性保全基本方針」を策定し、保全活動を推進しています。

当社の国内事業所で、自然環境保全法および都道府県条例にもとづく保護地域の内部や隣接地域にあるものではありませんが、事業活動が生物多様性に与える影響を把握するため、順次、生態系調査を行いました。

また、首都圏の水源を守る、また社員の環境意識を醸成することを目的に、公益財団法人オイスカと協働し、山梨県早川町において、森林保全や社員ボランティア活動を通じた地域との交流に取り組んでいます。

さらに、海外の関係会社でも保全活動を推進しています。

▶ DATA (P119) : 生物多様性関連データ

三菱自動車グループ 生物多様性保全基本方針

人類の活動が生物多様性の恩恵を受けているとともに、生物多様性に影響を及ぼしているとの認識を持ち、三菱自動車グループ企業全体で、地球温暖化防止、環境汚染防止、リサイクル・省資源の取り組みに加え、生物多様性に配慮した活動に取り組み、生物多様性への影響の把握と低減に継続的に努めます。

1. 事業活動での配慮

省エネルギー、廃棄物の発生抑制、化学物質排出抑制などを推進するとともに、工場建設などの土地利用においては周辺地域に配慮し生物多様性への影響の把握と低減に努めます。

2. 製品での配慮

燃費改善、排出ガス対策、リサイクル設計を推進し、環境に配慮した材料の採用に努めます。

3. 理解・啓発・自覚の継続

三菱自動車の活動と生物多様性の関係についての理解と自覚を、経営層から従業員まで全員で共有します。

4. 社会との協働・連携

サプライチェーンおよび株主、自治体、地域社会、NPO/NGOなどのステークホルダーと連携し、活動を推進します。

5. 情報の発信・公表

三菱自動車の活動内容や成果について、お客様や地域社会への情報発信・公表に努めます。

国内拠点の生態系調査を生かした 保全活動の推進

国内事業所における生態系調査

クルマの生産には大規模な工場を必要とします。当社の事業における土地利用が地域の生態系に与える影響を把握することは、生物多様性保全に取り組むうえで重要と考えます。

この考えのもと、当社は生物多様性関連のコンサルティング会社の支援を受け、工場など大規模な土地を利用する国内事業所での生態系調査を実施しました。調査では、国内事業所の敷地内のみならず、周辺環境の生態系を実地調査や文献調査から把握することで、地域の生物多様性と調和した保全施策につなげています。

生態系調査 実施拠点

実施年度	拠点
2013	滋賀工場
2015	岡崎製作所
2017	水島製作所／滋賀工場(※)
2018	十勝研究所
2019	京都工場

※：施策による保全効果を確認するためモニタリング調査を実施



京都工場でのビオトープづくり

2019年度に実施した生態系調査の結果から、京都工場はかつて地域に見られた植物や昆虫が局所的に生き残っている場所（レフュージア）になっており、地域の生物多様性を保全するうえで重要な環境であることがわかりました。工場では周辺の緑地に比べ、多様な種類の植物や昆虫類が確認され、広場にある池でもマユタテアカネをはじめ4種類のヤゴ（トンボ類の幼虫）が見つかりました。

【調査で確認された、都市部では珍しい種】



ウmanoアシガタ



シラスゲ



マユタテアカネのヤゴ

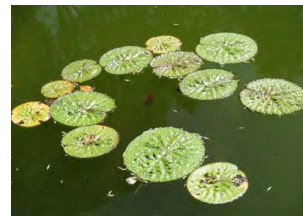
そこで、2020年度は敷地内の「憩いの広場」にある池を活用してビオトープをつくりました。池や草地に手を入れ、在来種で希少水生植物のオニバス・アサザ・コガマを植栽

し、トンボやバッタなど昆虫類の生息場所としての機能を高めることにしました。

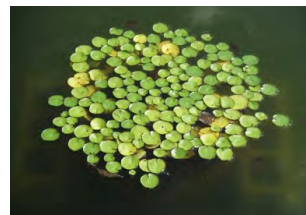
水生植物の苗は京都市南部クリーンセンター内の環境学習施設「さすてな京都」より株分けいただきました。



憩いの広場



オニバス



アサザ



コガマ

「憩いの広場」の池で育成したオニバスは順調に成長し、種子を採取することができました。採取した種子の一部は苗を提供いただいた「さすてな京都」に里帰りさせました。種子は、「さすてな京都」から、希少水生植物の育成・繁殖に協力する京都市内の企業や学校などへ提供される予定です。



採取したオニバスの種子

京都工場では、これまで京都文化に根ざした在来種であるフタバアオイを構内で育成するなど、地域と連携した生物多様性保全を進めてきました。さらに今後は、生態系調査で確認された京都工場と周辺の自然環境とのつながりを大切に、生物多様性保全を意識した構内緑地の維持管理を行うことで、地域の生態系保全に努めていきます。

海外における保全活動

三菱自動車（タイランド）カンパニー・リミテッド（MMTh）は、非営利団体（NPO）「三菱自動車・タイランド・ファンデーション（MMTF）」を創設し、事業の第1弾として、『MMTh60周年記念、60ライ森林再生プロジェクト』を2021年1月に発表しました。2021年度は、タイ王室森林局とタイ国家温室効果ガス管理機構と共同で、東部チョンブリ県とサケーオ県にある森林60ライ（9.6ヘクタール）の再生活動を進めます。MMTh社員と地域社会が一体となって活動を行い、地域の環境保全に対する意識の醸成に努めます。



タイでの植林の様子（チョンブリ県）